

「ウェルビーイングを考える

～みんなで踊りを：自然から“いのち”へ～

＜パネリスト＞	金沢 21 世紀美術館 奈良県生駒市 大牟田市動物園	館長 市長 企画広報・教育担当	長谷川 祐子 小紫 雅史 富澤 奏子 阿部 健一
＜コーディネーター＞	総合地球環境学研究所	名誉教授	

阿部 それではパネルディスカッションを始めたいと思います。皆さんどうでしたか。三つの発表各々テーマは異なりますが、どれもわくわくする話ばかりでもっと長く聞きたいと思いました。コーディネーターとして、さてこの三つの話をどうするかということですが、もう諦めています。楽しかった、このことが一番環境問題で実は大事なことかなと思います。

2015 年、気候変動枠組条約が全世界にアンケートを実施しました。その中で、温暖化対策をすると生活の質は上がると思いますか下がると思いますかという質問があり、下がるというのは日本だけでした。約 3 分の 2 の人が生活の質は下がると答えたのです。他の国の人たちは数値が全く逆で、生活の質が上がると考えているのです。確かフランスは 8 割くらいの方が上がると回答していたと思います。やはり、日本人は生真面目なかもしれません。問題解決をしなければ、いままで享受していた楽しさや豊かさが損なわれてしまう、何か我慢しなければいけないと思っているのです。しかしそう考えること自体実は間違いであり、というも今日の御三方の話をお聞きすれば分かると思います。わくわくするようなことが、実は環境問題の解決の中にはあるということ、実感として受け止めることができました。

そのような中で小紫さん、今日はほとんどアートと関係ない話をされました。アトリエのようなものはあるようですが、アート、芸術などはどうなのでしょう。

小紫 私自身はアートに詳しくないのですが、アートが好きです。生駒には芸術が好きで、退職されてアートを始める方は非常に多いです。いま町では子ども会がなくなったり祭りがなくなったりしているのですが、文化祭だけは増えています。1

カ月間ずっと文化祭をしていたり、1 日のものが 3 日間開催になったりしています。アートをやりたい人は増えており、生駒市の文化祭へ出品するまでは気が引けるような人が、自治会館のアトリエのようなところへ自分の作品を飾ったりするようなことをしています。例えば写真を勉強して撮ったりすると、誰かに見てもらいたいという思いが出てきます。そういったことから文化祭はますます増えており、生駒市でも実務的な意味でアートを活用しています。また、生駒市は音楽のまちでレベルも高いので、それをまちづくりに生かしているということもあります。

有名な本で皆さんご存じかもしれませんが、世界のリーダーはなぜ美意識を鍛えるのかという本があったと思います。アメリカ人は数学が苦手なのに統計をととても大切にすることを留学時に知りましたが、逆に我が国では科学に基づく行政やデータに基づく行政ができていないとよくご批判をいただきます。しかし科学やエビデンスだけでも、我々の仕事はできません。社会の変動によりはつきりした答えがない問題や、難しくても決められない課題が増え、市長に上がってきます。そういう時に何に基づいて決めるかは、自分の価値観しかありません。それができるのは市長だけです。市長は選挙によって選んでいただきましたので、最後は私自身の価値観、いままでの人生、アートだけではありませんがそういう価値観や審美眼、楽しさなどを含めて、私自身のものさしで最後は判断します。それで結果が伴わなければ、信頼を失い、次の選挙で落ちることです。正しいことが何かなんてよく分かりませんが、なるべく正しい判断をするために、少し言い過ぎかもしれませんが、私たちはアートを学んでいます。つまり、データだけではなくアートのもの、町に出て市民と話をすることで、いろいろな方の考え方などをしっかり学ぶことをやらなくてははいけません。我々

の「まちのえき」の一つの柱としてアートが考えられるし、私たち為政者の一つの判断、価値観を養う、そういう経験としてアートを学ぶ、そのような二つの面でアートはすごく重要であると今日の話聞いていました。ありがとうございます。

阿部 ありがとうございます。長谷川さん、この本はご存じでしたか。世界のリーダーはなぜアートを学ぶのか。

長谷川 本は知っていますが、読んでいません。

阿部 リーダーはアートを学ばなければいけないと、さきほどおっしゃっていました。

長谷川 基本的に欧米においては、特に欧米で勉強したアジアの指導者もそうですが、文化について自分自身の国が現在の文化を持っているかどうか、それをしっかり生成しているかどうか、つまり民度の競争になってくるのです。したがっていくらお金がありインフラが発達していても、文化のないところは一緒に議論する対等の相手としては認めないというのが徹底しています。そういう意味では、アートという非常に共有しやすいものです。例えば、中国の最高指導者であった胡錦濤が最初に参加したサミットのあと、私の知り合いの大学の先生を呼び、いま一番中国で有名な現代アーティストは誰かと聞かれ、その人のレクチャーを6時間、3日間させたというのです。サミットの帰りにそのことを聞かれて返答できなかったの、自ら学んだということです。フランスのマクロン大統領も、日本に来るときは現代アーティストや建築家など一緒に2人くらい連れてきて会議に参加させるのです。文化外交のやり方が、非常に明快です。

阿部 ありがとうございます。富澤さん、世界のリーダーは動物園に行かなければならないというような本はありますか。

富澤 ありません。

阿部 なければ富澤さん。もしかしたら動物園に行かなければいけない、リーダーや市長には来てほしいというようなことはありますか。一般の人にもいいですが。

富澤 リーダーや市長だけではなく、全ての方々に来て頂ければと思いますが、確かにリーダーの方々は重責があり、大きな決断をされなければいけない時にはどうしてもいろいろな可能性を考える必要があります。それが煮詰まってしまった時には、是非動物園を使っていただければと思います。私も毎月複数のイベントポスターを作らないといけないのですが、どうしてもアイデアが思いつかない時に、ナマケモノに会いに行ったりします。ナマケモノがアイデアをくれるわけではないのですが、ぼーっと見ていると、たまに思いついたりすることがあります。

また、楽しい時にも、もちろん動物園を利用して頂ければと思います。デートにも、ばっちりです。なぜなら、お相手の本質が見えるからです。お相手の方の動物に対する発言が、もしかしたら数ヶ月後には、あなたに対する発言になるかもしれませんが。もちろんご家族でも、お友達でも、おひとりでも、動物園はいかようにも楽しめます。十人十色の楽しみ方があると思うので、リーダーの方に限らず、会社員の方でもどなたでも利用して頂ければと思います。

小紫 おっしゃるとおりです。先ほどは、後ろに誰もいない、答えがない問いを決断しなければいけないということで、敢えて言いました。リーダーシップは、社長や市長だけでなく全ての市民、全ての職員もそうですが、持っておられるはずで、そういう意味では同じことかもしれません。全ての人はアートを学ばなければいけないし、動物園にも行って、いろいろな経験をすることが大切です。市役所の建物の中でずっといると美意識が磨けないので、やはり現場に足を運ぶということですかね。私も土日だけでなく平日も現場に行って高齢者やいろいろな方の話を聞くようにしていますが、介護よりも移動支援を不安に思うシニアが増えてきた節目に肌感覚で気付けたのも、そういうところへ行っていたからです。子育て世帯がいま一番悩んでいることとして保育園よりも多く出てきていることが何か皆さんご存じですか。実は圧倒的に発達障害です。情報が氾濫しており、やはり現場に行かないと分からないところがあります。そういうことも含めて、自分自身いろいろ学んで判断力を付けられないといけないと思いますし、それは市長に限ったことではないというのは、そのとおりだと思います。

阿部 ありがとうございます。小紫さん、うちの所長は山極壽一というゴリラの研究者ですが、山極がリーダーシップはゴリラに学べと常に言っています。ぜひ今度、対談でもしたらいいと思いますね。ゴリラから学ぶリーダーシップというタイトルで。

さて、もう1回富澤さんに聞きましょう。富澤さん、大牟田市動物園では確か美術館というか図書館がありますね。

富澤 はい。絵本美術館があります。

阿部 絵本美術館。動物園と美術、あるいは絵本ということですが、それをどうにかたちで利用しているのか説明いただけますか。

富澤 絵本美術館については、大牟田市出身の絵本作家、内田麟太郎さんの作品に、動物に纏わる話が多いことから、その原画を展示、収蔵したりする他、いろいろな企画展も行われています。

美術館さんとのつながりとしては、実は私、九州大学で教鞭(きょうべん)を執っておりまして、その時に福岡市美術館さんとコラボをして授業をさせて頂いたり、福岡市美術館に鳥獣戯画が来た時には、美術館のキュレーターの方と一緒に鳥獣戯画のライブ配信をやったりしたこともあります。それから、2024年は辰年ですよね。辰は伝説上の動物なので動物園にはもちろんいないのですが、美術館の総館長をライブ配信にお招きして、芸術の中の辰とはいったいどのような動物なのか、天に昇って玉を取ってくるなど、面白いお話をいろいろとお聞かせ頂きました。動物自体が芸術の中で表現されていることが多い他、動物自体の様式美、行動の美しさという部分でも、芸術とつながる部分は非常に多いと思います。これからも美術館さんとのコラボが沢山できればいいなと思っています。

阿部 長谷川さん、動物園はどうですか。なかなか動物、生き物と美術館は、美術館の側からいいますと、管理運営の立場から難しかったかもしれませんが。

長谷川 そうですね。動物に来ていただくことは難しいのですが、こちらからアーティストが出かけて行って、何かをすることはできると思います。富澤さんもご存知だったのですが、タイ

のコーラートという場所に大きな動物園があります。やはりバンコクでは環境が悪過ぎたので、そこにいた動物たちがみんな引っ越してきて、非常に伸び伸びと動物たちがいるところでした。タイのビエンナーレでやらせていただいたのですが、そこで何をやったかという、建築家が大きなタワーを造ったのです。孔雀(くじゃく)などがそこで放し飼いされているのですが、タワーの一番下にはお米を置いて餌場を作ります。そしていくつかの高さで段々を作り、そこに窓を作ってその窓のいくつかに橋をかけて人間が渡れるようにして、動物たちが食事をしている様子を上から見られるようになっていきます。違うところの上の段には、鳥たちがきて餌を食べるようにしています。つまりそこでは、下に動物たちがやってきてものを食べ、人間たちはそれを眺めたり、鳥たちがその上にやってきて食べたりなど、そのような人間と動物、鳥が一体となるような装置を作っており、それはすごく素敵でした。

したがって、やはり一緒にいられる意識といいますか、どういうふうに住らしているか、生体が等身大のところで見られるようにする場をつくることは、とても大切ななと思っています。実は、小紫市長のプレゼンテーションでとても感動したことがあって、一つお話をしたかったのですが、いま岡山で開催している森の芸術祭の会場の一つである奈義町をご存じですか。奈義町は2年前の1世帯あたり平均出生率が2.9人、ほぼ3人で、前首相が見学に来られて調査していかれたということです。児童園、こども園ができていて、以前からある児童園もあり、奈義町の良いところはみんなが子どもの面倒を見る習慣ができています。都会で子育てに自信がなくなったお母さんたちがこちらで来てみたら、子どもはそういうふうにしてあげばいい、野放しにしてあげばいいと言われ、その人たちの様子を見てると安心するということです。そういうストーリーを、子どもたちや外からやってきた人たちを含めて50人くらいにインタビューしたものを、アーティストが「IKI NO KOE」というタイトルのビデオにして作ったのです。そのビデオを奈義町長が感動され、いまそこで展示しています。奈義町の人口5000人で、みんな5000人がちょうどいい規模だといいます。見ていてそう感じました。規模が大きければいいというものではなく、それぞれのところで一種のクラスターやグループをつくり、みんなが見ることができる規模として5000人がちょうどいいかなという感じがしました。

その評判があつてまた児童園が新しく二つでき、外から移住してくる方が増えているとのこと。そういう規模の問題と、お互いがお互いをケアするコミュニケーションのあり方、デザインのようなもの。そのポイントとしてお話したかったこととして、1992年に磯崎さんが、Nagi MOCA という美術館を奈義町へつくられたことです。5000人の小さな自治体へそのような現代美術館がいきなりできて、3人のアーティストのユニークな作品がそこに展示してあるのです。しかし町の皆さんの何人かが、あの美術館が、始まりだったとおっしゃったのです。

私はそれがすごく印象的で、そういう児童園の仕組みと、それから奈義町の美術館にやってくる人たちの、ある意味での一つのコンボができていて、いわゆるマリアージュです。そういう意味での一つの文化的な共通の場ができたという感じです。そういうことに加え、命を育む場所と、文化について話せる場所です。森の芸術祭を初めてやったのですが、みんながすごくエキサイトしているのは、自分が知っている場所、洞窟の話、自分の知っている歴史の話、人が来た時にできるというのがすごいのです。そういうボランティアの方たちの、シビックプライドです。首長が一生懸命美術館をつくれるのはシビックプライドだと聞きますが、自分たちの物語が言えるということは非常に大きなことで、やはりそれは、先ほどの本箱を作るところでおじさんがやってくれるということ、では昔の話を聞かせてください、この話を聞かせてください、私はここにいますという、それは非常に大きいことです。本当に素晴らしいと思いました。

阿部 市長、宿題が。

小紫 いえいえ、大変光栄でありがとうございます。本当にみんなに役割があると偉そうに言いましたが、それは私が発見したというよりも、やはりアーティストの方に教えていただいたものです。プロのミュージシャンでかつデザイナーでもある彼が、友人と3人の方で生駒市の「まほうの다가しやチロル堂」というところを立ち上げ、2年前のグッドデザイン大賞、5000いくつあるうちの第1位を取りました。

もちろん竹細工があつたり、見ていてアートだなという評価もあるのですが、何がグッドデザインだったかという、まったく福祉の匂いがしないただの駄菓子屋に見えるところです。そのアートの人が、大人がお昼ごはんを食べ夜は飲み会をして、

その代金の一部を子どもたちにおごると言う見え方がよくないので、チロルという言い方をして、子どもが100円でもカレーが食べられるようにしたのです。それでチロル堂なのです。経済的に問題がない子も、本当に困っている子も、100円でカレーが食べられます。それは、大人がおごっているからという仕組みです。ただそれだけだとグッドデザイン大賞は取れなかったと思います。本当にアートやデザインの観点、コミュニティデザインのような意味かもしれませんが、そのアーティストの方が、福祉の匂いがまったくしない駄菓子屋を頑張つてつくっていただきました。

奈義町についてもすごい場所だとニュースや報道などメディアで出ていて知ってはいたのですが、政策がいいのか、お金の補助が手厚いのかと思ったりしていました。しかしいま長谷川先生の話聞いて、アートから始まった、美術館から始まったというのはすごいなと思いました。やはりそういう町のデザインや、アーティッ的なものがあるということで、奈義町のことをもう一度しっかり調べたいと思いました。ありがとうございます。

阿部 市長、動物園はどうですか。

小紫 私、動物園大好きです。水族館のほうが好きというのはあるのですが。子ども連れてよく行きます。(笑)

阿部 富澤さん、動物園はなかなか簡単にできないと思いますが、いま福祉の話も出ましたが、動物園や生き物いろいろなかたちで関われることもあるのではないかと思います。どうでしょうか。

富澤 そうですね。やはり動物を移動することによる、動物へのストレスを考慮せねばならないことから、当園ではそういったことはしていません。私どもには「どうぶつえん ひとりじめ」というプロジェクトがあります。動物園に行けない入院されているお子さんや、小さなお子さんがいらっしゃるご家庭でなかなかお出掛けが難しい方など、動物園に行くことが少々難しい方に動物園をZoomで楽しんで頂くというものです。

最初にご覧になられた動物を伺っておき、私が一緒にお話をしながらその動物を映します。ナマケモノを延々見たい方や、レッサーパンダをずっと見たい方など、いろいろなご要望

があります。そういったオンラインを介した動物園の可能性は、まだまだこれから広がっていくのではないかと思います。特に私どものような地方の小さな動物園には、活路を見出す方法のひとつなのではと思っています。

阿部 ありがとうございます。どうですか、御三方からそれぞれほかの方の発表を聞かれて、是非これは聞いておきたいということがあれば、お話いただきたいと思います。それでは小紫市長、お願いします。

小紫 そうですね。動物園の話もアートの話もそうですが、先ほど阿部先生も話されていたのですが、行政は本当に課題解決をしたがるのです。課題解決ばかり言っていると全く人が集まりません。たまたま高齢者の暴走老人の話から始まったので、歩いて行けるというところで「まちのえき」と言いましたが、動物園はとて素晴らしい場所なのです。

つまり人が集まる場所をいかにつくるか、デザインするかということ、あまりそういうものもつくることに力を入れるのではなく、なんとなく自然とそうなるのが一番いいのですが、動物園はやはり人が集まる場所ですよ。行政組織でいうと、市役所に人は喜んで来ませんのであまり人は集まりませんが、先ほどの図書館はどちらかというとポジティブなイメージでみんなが自然に集まってきます。そういう場所ができると、そこへ事業者さんがビジネスで集まってきたり、行政がその集まった人と何かやろうと集まってくるので、そういうようなことがとても大切だと思います。

そういうわくわくする場所、人が集まって何か生まれるような場所をたくさん地域につくるのが、行政の一つの役割だと私は思っています。そうすれば、自分も何かやろうという、行政ではなく市民自らが何かやりたい、この場所でこんなことをやってみたいとなります。先ほどお話ししましたが、図書館のワークショップをすると、夜の図書館でビールが飲みたいと言い出した人がいて、背徳感の中で飲むビールは最高にうまいなど言われ、普段本を読まない人がビール目当てに図書館へ来て、その人が図書館に通うようになったという話なども聞きます。そういう新しいきっかけ、楽しい場所、普段と少し違う非日常をどうつくっていくかということが、我々にとって大切です。魅力創造という言い方もできます。

その中で、逆にアートや動物の切り口で、いまのような文脈でこんな場所があったらいい、こんな機会や場があったら面白い場所ができるのではといったことを、すでに少しお答えいただいた気もしますが、教えていただければありがたいと思います。これは質問というか私からのお願いになります。

阿部 小紫さんがおっしゃった人が集まる楽しい場所、美術館も動物園もまさにそういった場所ですね。わくわくするような場所です。

小紫 我々が町づくりや地域づくりと言って集まる場所にしても、アート側にとっても何か面白いということでない駄目だと思えます。そういう意味で、アート、動物園のほうでも歓迎する、お互い楽しい場所がどういふふうにできるかなというふうに思いながら聞いていました。何か教えていただければ、ありがたいです。

阿部 それでは富澤さん、長谷川さんの順でお答えいただくことにしましょうか。1人で決断を迫られ悩んでいる市長さんへ、それぞれの立場からアドバイスもしくは、こんなことはどうでしょうかというサジェスションでも。

富澤 そうですね、先ほど市長が発達障害のお子さんのお話をされました。動物園は生涯教育施設だと先程申し上げましたが、この生涯教育というのは誰の生涯なのかを考える必要があると思います。健常者の方をターゲットとして考えてしまいがちです。そこで私どもは、例えば「手話でどうぶつえん」というYouTubeのライブ配信をするなど、目の見えない方、耳の聞こえない方にも楽しんで頂ける動物園を目指しています。

もちろん健常者の方においても、いろいろな年齢層の方にお越し頂いております。ただ、障がいというのは周囲の環境がつくっているものであると考えると、必ずしもその人個人のものではないのかもしれませんが、そこで私たちの動物園は、障がいをお持ちの方が、ご自身の障がいを感じないような動物園を目指していきたいと思っています。もちろんこれは、発達障害のお子さんにも当てはまります。

私どもの動物園は、出口と入口が一緒です。必ず同じ道を行って帰ってくることになっていますので、迷子になりにくい環

境です。また園内には車が入りませんので、交通事故が起こりません。園内で迷子になられた時には、園内放送をかけ、全職員が探します。これまで迷子の方が見つからなかったことはありません。どのような方でも、さまざまな目的で安心して楽しんで頂ける動物園を目指しています。このような施設を作っていくというというのが、ご参考になりましたら幸いに存じます。

小紫 ありがとうございます。大変示唆に富む深い話で、さらに少し質問をさせていただきたいと思います。いわゆる健常者でない子たちに役割があったり、先ほどの高齢者も同様で守ってあげなくてはいけないと言った瞬間に来なくなってしまうので、子どもたちが活躍できたり、逆に大人に教えたり、おじいちゃんの力になったり、例えば障害のある方が逆に何か役割を持ったりするような場所が、動物園ではなくてもいいですが、何か市内の公共施設などでできたらいいなと思います。

いま、先生が子どもに教えるだけというのは駄目だ。子どもが教えあったりする機会をどうつくるかということをやっています。学校という場所だけではなく、だいたい子どもが親に教えるというと、デジタルや、あとはメダカ博士やつばめ博士が生駒にもいますが、動物との関係でいうと、いわゆる弱者、守ってあげなくてはいけないと思っていた人が、実は自分よりも詳しい博士だったというようなこともあり、そういう切り口で、動物というのはとても面白い可能性があるなど個人的には思ったりします。

もちろんいまお話があったようなユニバーサルということも必要です。ただ逆に、健常者といわれる人に、障がいがある人が教えるというようなことは、とても面白いなと思います。子どもが教える、シニアの人がいろいろなことを頑張る、活躍するのはとても面白い、そんなことばかり普段考えています。動物という切り口は、とても面白いなと思います。ありがとうございます。

富澤 一つだけ付け加えさせていただきます。私も教育活動には非常に関わりがあるのですが、私たちの動物園における教育活動では、教えないように気を付けています。私たちが教えるというものではなく、むしろ参加者の方に、私たちのほうが教わるのが非常に多いのです。私たちが気付かない、あるいは知っていたはずなのに、見失っていた部分を教えて頂ける貴重な機会です。そういった教育、そして科学的な興味の充足というところが、動物園では大切なのではと思います。

阿部 はい。それでは長谷川さん。もうすでにいろいろ指摘とかご意見を頂いているのですが、なおかつさらにもう一言というのがあればお願いします。

長谷川 私、金沢へ1999年に初めて行ったのですが、その時に山出市長に、強い市民をつくってくれと言われたのです。強い市民という意味はなんだろうとずっと考えてきました。もともと伝統があり工芸でいろいろ作っている人も多く、そこへ世界中の一番新しい情報や、やり方、方法などを情報として取り入れて、みんながそれをグローバルに共有することでより強いリアクションを得て、より生産性を高めていくことではないかと思います。創造性や生産性を高めることは、私は非常に大事だと思います。いまは受け身の話が結構多いと思っていて、そうではなく本当に生産性を高めていかなければこの国の将来が心配で、これからやってくる子どもたちのことを本当に考えなければいけないと思います。

そこでやはり、先ほど小紫市長がおっしゃっていて私が気になったのは、公園があまり使われていないことを話されていたのですが、実はあまり使われていないと思っている場所がすごく大事で、私が妹島さんという建築家の方とお話した時に、公園のような美術館を目指しようと言ったのです。それはどうしてかという、公園ではそれぞれが違うことをしているではないですか。縄跳びをしている子がいれば、お弁当を食べている人、読書をしている人もいます。しかしみんながそこにいることは、なんとなく分かっています。そのような場の力というか、そこにいたら安心だな、そこで刺激的なことをやっているなど感じることは、すごく大事ななと思っています。つまりはダイバーシティ、それぞれの人たちのある意味で個性や強さを生かしながら、どうやってそれを共感できる場所をつくっていくかというやり方も大事ななと思いました。

小紫市長のお話で、みんなが集まって何かをするということ、イベント的なあるいは具体的な要件があるということは非常に分かりやすく大事なことです。そうではなく本当の創造性やレジリエンスというのは、一人一人が放っておかれたときに何を実際にやっていけるのかという力も必要なと思います。自閉症のお子さんがいれば、それを無理やりみんなと一緒にさせるのではなく、その子が何を自分で見いだせるのかという

ところを助けていくやり方も大事なのかなと思います。積極的に何かに関与させるということではなく、もっと別のやり方が実はあるのではないかなと私は思ったりしています。

そこにオンラインであったりゲームであったり、そういうことも使いながら、相対的な関係性を持った場所をつくっていくということも、一つあるのかなと思います。そのようにして強い市民をつくるというテーマへは、おそらくいろいろな解があると思います。それに関して美術というのは、あくまでもそれぞれの人の主体をいかに尊重するかということが大事なポイントでもあるので、そういうことをまた新しい議論として考えていただけたらいいかなと思ったりもしました。

あとはインタースピーシーズの会話ということで、動物は冨澤さんのご専門なのですが、先ほどマンクーツ先生が叫んでいらしたように、植物とも話をしなければいけないというのがあります。やはりそれをおろそかにしていたので、人間はこれだけいろいろな意味で、環境に対して人新世という非常に危険な状態に持ってきてしまったということ、人間中心主義の行き過ぎが問題になってきているということは、みんな言っています。それでは、ほかのものとどうやって話せばいいのかとなると、話ではなくいろいろなやり方があります。つまり、レッサーパンダにはレッサーパンダに対してどのように関わればいいのかについてレッサーパンダの視点に立って考えることも大事ですが、レッサーパンダにも私たちのことを考えてほしいということもあると思います。

ですから、相手に対しての「あげる」というのではなく相互性はすごく大事で、そのバランスは「めちゃくちゃ」大事だと思います。小紫市長が何度も「めちゃくちゃ」とおっしゃるので、私も「めちゃくちゃ」と言ってしまうのですが、それにはすごいポテンシャルが、こちらの一つの提案やモデルなどの観察のインパクトとして「めちゃくちゃ」というのはすごく大事な言葉だと思っているので、そういうことも本当にエネルギーを頂いた今日のディスカッションだったと思います。まともなかつたですね。

阿部 まとめていただき、ありがとうございます。最後に御三方からメッセージをと思っていたのですが、もう時間になりました。それにもう十分メッセージは頂いたのではないかと思います。楽しい場、実はわくわくしながら語れるそういったことが環境問題だということで、今日御三方をお迎えして、そのことが実践

できたのではないかなと思います。その御三方に感謝申し上げて、パネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(終了)